学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	西田　諭子 【比較社会文化学専攻　平成２２年度生】	この論文はポーランド出身の作曲家である、フリデリク・フランチシェク・ショパンのピアノ作品を事例として、19 世紀前半の西洋音楽における調性の様相を明らかにすることを目的としている。19 世紀の西洋音楽はヴィーン古典派によって確立された調性構造が徐々に解体し、20 世紀の無調へと向かう大きな流れがあるが、そのなかでショパンのピアノ作品もまた調性の諸現象を同時代の音楽作品群と共有している。これまでのショパン研究でも部分的に調性や和声についての言及はあるものの、調性解体の構成要素を網羅的に抽出した研究は出ていない。 この論文では、いわゆる『ナショナル版』と呼ばれる楽譜に所収のピアノ独奏作品 153 曲を対象として、それらを丹念に楽曲分析し、還元譜と名付けられた和声構造を示す楽譜を作成し、調性と和声を中心に考察を行なった。その結果、調性解体の一つの要因として単一の主調による支配がドミナント・トニック軸に関して弱体化する現象を、調的参照点という概念を用いて検討することで、主音とは別の第二の調的参照点が形成されること、さらに強調音の存在を指摘し、それによって、楽曲における構造的凝集性の強化と同時に主調支配の浸食が現われることを明らかにした。この調的参照点の二重化がショパンの作品における調性解体としての主調の浸食に対して、従来指摘されてきた半音階的書法の他に、重要な要因となっていること、そしてその後の時代における複調性の萌芽とも考えられることが指摘された。また、ショパン自身がピアニストである点を勘案し、鍵盤に対する手の身体感覚での強調音や調的参照点のとらえ方ができることも、さらなる議論への端緒として示した。 以上、本論文は 19 世紀西洋音楽研究に新たな知見を示した。
論 文 題 目	ショパンのピアノ作品の調性構造－調的参照点としての強調音の構造的機能－	
審 査 委 員	（主査）　教授　永原　恵三	
	准教授　小坂　圭太	
	助教　井上　登喜子	
	准教授　中村　美奈子	
	聖徳大学音楽学部　教授　徳丸　吉彦	